

難民 REFUGEES

2000年第3号 (通巻118号)

瀬戸際に立つ シエラレオネ



UNHCR

国際連合
難民高等弁務官
事務所

激化する論争

1999年の末、アナン国連事務総長は、長引く内戦から何百万もの一般市民を救うため、大胆で新しい試みに参加するよう、国連加盟国に強く呼びかけた。国の基盤である「主権と国境の不可侵」よりも、人道的活動という高次元の価値を第一とする事務総長の呼びかけは、新たなミレニアムの始まりに、最も重要で、かつ問題の多い議論のひとつに火をつけた。

身近に起きた戦乱からかろうじて隣国へ逃れた犠牲者の多くは「難民」として分類され、1951年の難民条約で定められた国際法の庇護対

internally displaced person)』という耳障りな略語で分類されている」。IDPとは国際法上の用語で、住んでいた土地を追われながらも自国内に留まった人々を意味する。「しかし、こうした人々も実態は難民だ」と大使は述べ、「難民」の定義がすでに時代遅れであり、これからは全世界で2000万人から2500万人と推定されるIDPも難民に含めるべきだと主張。UNHCRは現在与えられた任務により、2150万人といわれる難民とその他の援助対象者を支援しているが、今後は任務を拡大し、国内避難民も支援する必要があると付け加えた。

ブルッキングス研究所（ワシントン）の難民問題専門家、ロバータ・コーエンは、難民とIDPを厳密に区別すること自体が「もはや全く無意味」であり、今や「国境をはさんで両側に住む人々のニーズに対応する体制作りが必要」と述べているが、UNHCRがこの問題を担当すべきかについては疑問視している。

緒方貞子・国連難民高等弁務官も同様の懸念を表明している。資金提供者である主要国政府がUNHCRのような組織への拠出金を減らし、紛争地域への直接援助を重視する現在、著しく拡大するであろうUNHCRの任務への資金を誰が提供するのか。また、難民支援というUNHCR本来の任務を全うしながら、難民とIDPという国境の両側にいる人々を援助できるのか。結局、両者のいずれも十分に援助できないのではないか。

これらの問題でさえ、根本的なジレンマに比べれば、解決は簡単そうに見える。国内避難民を支援するには、内戦状態で、まさにその存続をかけて戦っている紛争当事国政府の承認を得る必要があるのだ。この論争が始まった時に交わされた激しい議論を考えると、紛争地域の国の政府が、自らの支配力をみすみす弱めるようなことはしないだろう。

先の長い論争が始まったようだ。



多くのソマリア人がこの家族のように、長引く内戦で故郷を追われている。

象となる。しかし事務総長の呼びかけの中心には、自国内にとどまる2000万から2500万人の人々の苛酷な運命がある。これらの人々は、難民よりもはるかに危険で不安定な生活環境に置かれている場合が多い。

予想通りといえようが、国際社会の意見はすでに、はっきりと二分されている。西側の先進工業諸国が「国連は状況に応じて紛争国の内政に介入し、不幸にして戦争に巻きこまれた人々を支援すべきだ」との考えを全面的に支持する一方、中国や第3世界の国々は、「国際関係の基本原則は国家主権の尊重と内政不干渉であり、人道問題ではない」と主張している。（本誌117号「新たな時代の重要課題」を参照）

リチャード・ホルブルック米国連大使は、最近この論争に加わった。安全保障理事会で「難民とは何か？」と問いかけた。「世界中で家を失った人々の3分の2が『IDP（国内避難民、



編集者: Ray Wilkinson
 寄稿者: Anne Encontre, Raouf Mazou,
 Kingsley Amaning, Andrej Mahecic,
 Khassim Diagne, Diederik Kramers,
 Guy Noel Ouamba,
 Fatoumata Sinhoun Kaba,
 Christine Mougne.

編集アシスタント: Virginia Zekrya
 写真部: Anneliese Hollmann, Anne Kellner
 デザイン: WB Associés - Paris
 制作: Françoise Peyroux
 総務: Anne-Marie Le Galliard
 配本・発送: John O'Connor, Frédéric Tissot
 地図・衛星画像: UNHCR - Mapping Unit

日本版
 翻訳協力: Scott Bunnell, 多田倫子, 川島敏邦,
 ㈱コンテンツポラリー
 編集・総務: 日本・韓国地域事務所 広報室

『難民Refugees』誌は、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)ジュネーブ本部・広報部と東京にある地域事務所が発行する季刊誌です。寄稿記事に表わされた意見は、必ずしもUNHCRの見解を示すものではありません。また図示された国境の表示は、各領土およびその政府当局の法的立場に対するUNHCRの見解を表明してはおりません。

掲載記事の編集権はUNHCRにあります。掲載記事・写真のうち、著作権表示のあるものの転載・複製は一切できません。また表示のない写真の使用については、下記のUNHCR事務所までお問い合わせください。

本誌の日本語版制作協力: ㈱コンテンツポラリー、英語版および仏語版制作協力: ATAR sa (スイス) 本誌の発行部数は、英語、仏語、ドイツ語、イタリア語、日本語、スペイン語、アラビア語、ロシア語、中国語の各国語版を合わせ20万6000部。

発行: UNHCR日本・韓国地域事務所
 〒107-0052
 東京都港区赤坂8-4-14
 TEL 03-3475-1615
 FAX 03-3475-1647
 ホームページ
<http://www.unhcr.or.jp>
 郵便振替 口座番号
 : 00190-8-8870
 加入者名: UNHCR
 業務時間: 月曜～金曜日
 9:30～17:30
 (昼休み12:30～13:30)
 日本語版発行: 2000年8月

表紙: 隣国ギニアで食糧の配給を待つシエラレオネ難民。
 UNHCR / C. SHIRLEY



UNHCR ジュネーブ本部
 P.O. Box 2500
 1211 Geneva 2, Switzerland
www.unhcr.ch

訂正:
 「難民」117号
 24ページの写真クレジットは
 UNHCR / B. NEELEMAN

難民 REFUGEES

2000年第3号(通巻118号)



UNHCR / B. NEELEMAN

4 ギニアにいるシエラレオネ難民の子どもが描いた絵。10年にわたって祖国が引きずり込まれた混乱を生々しく描いている。和平合意に不安はあるが、それでも新たな希望をもたらした。



UNHCR / R. WILKINSON

21 アイスランドは難民にとって思いがけない受け入れ国。最近では移民が、食事など、この島国の慣習を変えつつある。



UNHCR / H. J. DAVIES

26 第三者機関に評価されたコソボ危機におけるUNHCRの活動。重大な弱点がいくつか指摘されたが、要因の多くがUNHCRの力の及ぶ範囲外にあったと付け加えられた。

2 編集部から

- 国内避難民をめぐる激化する論争。

4 特集

- 戦乱の影がまだ消え去らぬ中、シエラレオネに平和のチャンス。
レイ・ウィルキンソン

- 年表
シエラレオネ略史

16 世界地図

- 最近の世界情勢

18 西アフリカ

- 西アフリカ地域の難民問題は全てつながっている。
コリーヌ・ベルチュイ

21 アイスランド

- 遠く離れた土地に安らぎの地を見つけた難民たち。
レイ・ウィルキンソン

24 ティモール

- 帰国しても戦いは続く。
ポール・ストロンバーグ

26 コソボ

- コソボ危機におけるUNHCR活動の評価。

28 Short Takes

- 世界からの短信

30 People and Places

- ひと

31 Quote Unquote

- ひとこと

許しはする... が忘れはしない

悲惨な
戦争を
乗り越え、
平和を
築こうとする
シエラレオネ

レイ・ウィルキンソン

カサブランカ・フィールドはその名のとおり、往年のハリウッド映画「カサブランカ」を彷彿とさせるロマンチックで不思議な雰囲気の色濃く漂う土地だ。近くでヤシの木が海辺の風にゆれ、大西洋の大波がゆったりと海岸に打ち寄せる。喧騒と料理の匂いに包まれ、粗末だが活気のある、アフリカのどこにでもあるような村が、丘陵の斜面に雑然と広がっている。

(6 ページにつづく)



内戦で手足を失った人々。
首都フリータウンの特別キャンプで。



集まった女性たち。有力な市民活動グループのメンバーがフリータウンに集い、地元でのできごとや平和への見通しを語り合う。

ここで起きた悲劇を知らされていても、訪問者は最初、明るい色彩と活気に満ちたごく普通の村だと惑わされてしまう。だが、通行人に大きな身ぶりで道を教えている村人の右腕は、肘から先がない。6歳くらいの少女が松葉杖で元気に歩いてきて、にこやかに手を振る。近くの小屋で、手際良く散髪をしている床屋は片手だ。突然目の前に現れる衝撃的な現実に圧倒される。

この村は、西アフリカのシエラレオネで十年近く続いている現代で最も残忍な戦争の被害者たちが寄り集まった場所のひとつだ。一時はシエラレオネのほぼ全人口の440万人が、住んでいた土地を追われ、身の安全を求めて周囲の森へ逃げ込んだり、山を越えて隣国のギニアやリベリアで難民となった。民



フリータウン中心部に立つ、未来への希望をこめた看板。「シエラレオネの人々よ。神が汝を愛する如く、互いを愛せ」

族・地域間の対立や、豊かな金やダイヤモンド資源をめぐる熾烈な争いが原因の戦乱で、何万人もの人々が犠牲となり、数知れない女性と少女がレイプされ、村という村が破壊され、村人が拉致された。ボスニアと言えば「民族浄化」、ルワンダ

と言えばツチ族の大虐殺が常に連想されるように、犠牲者たちの特異な運命がシエラレオネの内戦を象徴している。反政府勢力の兵士が人々を恐怖に陥れ、政府を脅すためだけに何千人もの罪の無い一般市民たちの手足を無差別に切断したのだ。

1800人を超える犠牲者と家族が、首都フリータウン郊外の村、カサブランカにある「手足を切断された人と戦争負傷者のキャンプ」と呼ばれる施設で暮らしている。2歳のメムーナが最年少の犠牲者だ。1998年にフリータウンが攻撃された時に両親が殺され、彼女は銃で撃たれた傷がもとで右腕を失った。ある家のベランダでは、片腕の男たちが床屋になるための技術を習っている。国内で唯一という義手や義足を生産する小さな工場もある。少なくとも2000人が義手・義足を待っている。

両手を切断されて

キャンプにある学校の校長を務める28歳のアブドル・サンコー（反政府勢力の指導者フォディ・サンコーとは無関係）は、最も痛ましい犠牲者の一人だ。1999年1月に反政府勢力がフリータウンを攻撃し、市街地がほぼ制圧されると、彼は森へ逃げこんだが、数日後マンゴを探している時に捕らえられた。食料運搬係をすると申し出たが、見覚えのあるゲリラ兵に、教師で裏切り者だと糾弾された。

ゲリラは村を焼き払い、彼を告発したゲリラ兵がサンコーの家から斧を持ち出して彼を地面にねじ伏せ、右手を切り落とした。次に左手を切断し、意識を失って倒れている間に口の周辺を切り、耳の一部を切り取った。そして他の多くの犠牲者に言い捨てたように「(カバー) 大統領のところへ行け。大統領がおまえの手を取り返してくれるぞ」とあざけり笑った。

出血がひどかったが、サンコーは安全な場所を求めて歩き続けた。シエラレオネ文民政府と周辺諸国のために反政府勢力と戦っている西アフリカ平和維持軍（ECOMOG）の兵士に撃たれて、殺されそうになったりもしたが、最後には妻と子ども二人と共にフリータウンにたどり着き、キャンプにいる何百人もの子どもたちのための学校設立に力を貸した。

今だに過去の恐怖にうなされ続け、さらに将来の生活に対する極度の不安にこの教師は苦しんでいる。ゲリラに身体中をズタズタにされたと重い口調で語った後、おそらくもっと辛い思いで彼はこう言った。「私はひとりではトイレにも行けず服も着られない。妻はまだ若い。見捨てられても不思議はない。一緒にいれば妻の未来なんてありません。まるで化物のような身体なんですから。」

平和が訪れても、恐怖による支配を情け容赦なく行った若者たちと共存できるのだろうか。「我々は彼らを許す、と言う

だけ言います」とサンコーは苦々しげに言った。「しかし、彼らが武装解除された時には、許しなどありはしない。復讐あるのみです。復讐があるに決まっています。」

最近本誌は、国内とギニア、リベリアにいる難民47万人の多くに話を聞いた。驚くべきことだが、内戦中、残虐な行為が広くおこなわれていたにもかかわらず、サンコーのように復讐を唱える声は、少なくともインタビューした人たちの間ではまれだった。

許しはするが、忘れてはならない

「過去の出来事は忘れられない。けれども、平和のためなら許しましょう。だから、せめて平和だけは欲しい」と語る

のは、ギニアのフォレカリア難民キャンプにいるサンディフ・ムスタファだ。

労働組合、教会、市民団体などを傘下に収める「公正な統治を求めるキャンペーン」の委員長を務める女性、ザイナブ・

何万人もの人々が犠牲となり、多数の女性や少女がレイプされ、村が破壊され、村人たちが拉致された。

バングラはこう語った。「この運動は愛からではなく、必要から生まれました。私たちは、悲惨な事実を過去のものとするように心がけ、許し、前進せねばなりません。しかし、過去の事実を決して忘れはしないでしよう。」

彼女の率いる運動は、一般市民の多くが何年もの間抑圧されてきたこと指摘し、延々と続いた戦乱の淵からシエラレオネを救い出すことに大きな影響を与えた。

内戦は、1991年にフォディ・サンコー元伍長の率いる革命統一戦線（RUF）が、当時の文民大統領ジョセフ・モモに対して起こした武装蜂起に始まった。1992年の軍事クーデターによりモモ大統領は追放されたが、1996年の複数政党が参加した選挙で、弁護士アフマド・テジャン・カバーが大統領に選出され、サンコー元伍長の革命統一戦線と和平協定を結んで、再び文民統治となった。

その後も、文民統治と軍事圧政による戦争と平和が交互に繰り返された。翌

西アフリカの主な難民居住地域と帰還地域





フリータウンの破壊された住居跡で暮らす避難民。

1997年、ジョニー・コロマ少佐がカパー政権を倒し、サンコーRUF議長が暫定軍事政権の副議長となった。国連と近隣諸国は、この政権を国際的に孤立させ、国内ではバングラ委員長が、結成したばかりの組織で、一般市民による抵抗運動を開始した。1998年3月に、ナイジェリア主導の西アフリカ平和維持軍によってカパー大統領が復帰し、軍事政権がフリータウン

から追い出されるまでの10カ月間、抵抗運動によって国の機能を事実上停止させた。

1999年7月7日、一般市民による国内の圧力と大規模な残虐行為に目を向け始めた国際社会の圧力により、紛争当事者は協定に調印、連立政権が生まれた。この政権は反政府兵士の武装解除を行ない、反政府軍兵士の社会復帰と数十万人もの難民の帰郷を実現することに合意した。

打開策を探して

ウガンダの外交官、フランシス・オケロは、1999年の任期終了までの二年間、国連事務総長の特別代表として、打開策を見い出そうと努力した。

彼は平和への道のりを次のように語った。「秘書と政治担当官の二名のスタッフだけで仕事を始め、三つの目標を掲げました。それは、当時権力を握っていた

逃げきるために、 ちぎれかけた手を自分でもぎ取った...

1998年5月、セレコリア村が反政府勢力ゲリラに襲撃され、仕立屋で7人の子を持つアリー・Kが捕まった。ゲリラは村中の家を焼き払い、アリーは隣村の少年と一緒に鎖で繋がれて、森の中へ連れて行かれた。ほどなくゲリラはアリーの左手を切り落とす。「三人がかりだった。一人が銃を突きつけ、あとの二人が切った」と彼は振り返る。

切り株の上に据えられたアリーの左手に4回もナタが振り下ろされ、手はわずかな肉片と皮だけでつながるまでになった。「モスキト」と呼ばれる若い指揮官率いるゲリラたちに、右手をも一回切りつけられた。そして友人と一緒にむちで追い払われた。

シエラレオネで頻発するこの種の残虐行為の例にもれず、アリーは理由も告げられず手を切り落とされた。そして文民政府を

支えるナイジェリア軍宛ての、闘争の理由が書かれているであろう手紙を渡された。

森の中を必死に逃げる間、傷口の血は止まらなかった。包帯などあるはずがない。最後には、ちぎれかけた左手をもぎ取り、林の中へ投げ捨てたとアリーは言う。「逃げながら（落ちそうな手を）押さえたいらなかった」と語る。その後ようやく家族と再会し、庇護を求めて隣国のギニアまで歩いていった。傷の手当てができたのは、その病院にたどり着いてからだ。

軍事政権の排除に向けての努力、敵対関係の終結、憲法に基づく統治と恒久平和の再確立でした。」

往復外交の最中にも殺りくが続き、オケロ特別代表は自分の存在が全く無意味だという、深い孤立感を味わった。カバール大統領が復帰した時ですえ、特別代表の任務が果たせるかどうか危ぶんだ。

「一時、反政府勢力が敗北したという錯覚がありましたが、平穏だったのはうわべだけでした」と彼は振り返る。軍事力だけで戦争は終わらない、交渉が唯一の解決策だ、と提案するとオケロ特別代表はのけ者扱いされるようになった。

「問題が起きることは前々から分かっていた」と特別代表は語る。「当時でも対話が必要なのは明らかでした。しかし、その時は停戦を唱えたら、街の中でリンチに遭いかねない状況だったのです。」不思議にも1999年初めの反政府勢力によるフリータウン侵攻中に転機が訪れる。

その後、ロメで交渉が開始された。「人々は、精神的にひどく傷ついていました」とオケロ特別代表は言う。「あの泥沼状態から出る唯一の方法は、どんな代償を払っても、そこから抜け出すことでした。両勢力とも疲れきってしまえば、そこから平和がつかめることもあるのです。政府は反政府勢力との連立を受け入れ、その兵士たちには全面的な特赦を与えました。他に選択の余地がなく、悪魔との取り引きに応じるという代償を払うことが必要でした」と彼は語った。

「しかし」と、任期を終えたオケロ特別代表は続けた。「内戦の当事者双方が、手付金を払ったこのチャンスを見のがしてはならないのです。」

和平合意の中で、特赦がおそらく最も激しい論議を呼ぶ部分であり、人道援助団体からは厳しく非難された。しかし、内戦終結の交渉に当たった関係者らは、オケロ特別代表と同様、特赦が交渉の唯一の方法だったと主張した。「正義が歪められたのではなく、先送りされたのです。全面的な特赦が実施されなかったら、反政府勢力

シエラレオネ略史

1787年

現地の部族長らが英国人難民にわずかな土地を売却。後に英国の解放奴隷を移住させ、最大の移住地がフリータウンと呼ばれた。

1961年4月27日

英国から独立、フリータウンが首都になる。面積は約7万2000平方キロ。大西洋に面し、東と北をギニア、南東部をリベリアと接する。

1978年

サイアカ・スティーブンス大統領による一党体制の国家が成立。1985年に80歳で同大統領が引退、ジョセフ・モモ元軍司令官が引き継ぐ。人口は少ない(2000年初め現在440万人)が、ダイヤモンド・金・鉄鉱石・ボーキサイトが豊富。

1991年3月23日

フォデー・サンコー元伍長の率いる革命統一戦線(RUF)が武装蜂起。10年におよぶ内戦が始まる。死者1万人以上、手足を切断された人々の数は数万人にのぼり、人口の半数が故郷から逃れ出た。

1992年4月29日

バレンティン・ストラッサー大尉が軍事クーデターを起こし、モモ大統領を追放。

1996年1月16日

ジュリアス・マアダ・ピオ副議長が、今度はストラッサー議長を追放し、複数政党の選挙と文民統治を公約。3月15日の大統領選挙でアーマド・テジャン・カバールが勝利し、11月にRUFのサンコー議長と和平協定を結ぶ。

1997年

和平協定はすぐに破たんし、サンコー

RUF議長はナイジェリア訪問中に逮捕、軟禁される。ジョニー・ポール・コロマ少佐はカバール大統領に対し軍事クーデターを起こし、サンコーRUF議長もこれを支持。しかし、国連はこの暫定軍事政権に対し石油・武器の禁輸と渡航禁止措置を取った。

1998年

ナイジェリア主導の西アフリカ平和維持軍(ECOMOG)が、軍事政権と反政府勢力をフリータウンから駆逐し、3月にカバール大統領を復帰させる。近隣諸国の協力によりクーデター後、文民指導者を復帰させたアフリカで初めての例となる。サンコーRUF議長はナイジェリアから強制送還され、反逆罪で死刑宣告を受ける。反政府勢力による組織的な一般市民の手足切断など、国内全域の恐怖支配が続く。

1999年

親軍事政権派と反政府勢力の連合軍がフリータウンを攻撃、ほぼ占拠。死者およそ5000人。その後ようやく和平交渉が開始される。

1999年7月7日

5月の停戦合意調印後、トーゴの首都ロメで和平協定が成立。これにより、反政府勢力は武器を捨てることと引き換えに連立内閣の4閣僚のポストを獲得。

1999年末から2000年

武装解除はなかなか進まず、地方に多く残るゲリラによる一般市民への襲撃や脅迫が続く。周辺諸国に逃れた難民は帰国を強く望むが、ゲリラ全員の完全な武装解除の後でと要望。何十万人もの帰国支援のため、UNHCRなどの関係機関が予想される事態への対応計画を作成。だが、本格的な難民帰還は武装解除と再定着計画の成否にかかっている。

は攻撃を止めず、和平に向けた取り組みも始まらなかったでしょう」とあるアフリカの国の高官は語る。

シエラレオネの内戦は、
ゲリラによって手足を切断された、
何千人もの罪の無い一般市民に象徴される。

「私たちは前進せねばなりません」と、バングラ委員長は言った。しかし、近い将来のある時点で「何が起きたのか、なぜ起きたのかを調査すべきです。過去を検証し、答えを見つけたら、本当の和解にはなりません。」

シエラレオネは、南アフリカが自国のアパルトヘイト時代の犯罪を調査した「真実と再融和委員会」と同じような



社会復帰のための訓練で、車の修理を学ぶ元少年兵たち。

組織の設立を考えている。

この組織が調査すべき、残虐極まりない行為の一つが「手足切断作戦」だ。手足の切断が組織的に行なわれ、ぞっとするような言葉が使われた。ゲリラは犠牲者に「長袖」か「半袖」かと気味の悪い質問をした。つまり、ひじより下で切るか、上で切るか、という意味だ。作戦には「みな殺し」という奇異で不吉な名をつけた。強制的に徴用した若い兵士に、入隊の儀式として、時には両親を殺害し、隣人たちの手足を切断するよう強要した。

作戦の名前はともかく、非常によく計画・組織化され、恐怖をかき立てる作戦だったことは確かだ。現地の歴史には四

肢切断の儀式がある、とほのめかす識者もいたが、アフリカ人ジャーナリストのトマス・カマラは、「こんな作戦は、アフリカで前代未聞だ。内戦で行なわれた行為と、内戦以前にあった出来事との、歴史的つながりは見当たらない」と主張する。

バングラ委員長は、「ゲリラは、自分たちの犯した残虐行為の深刻さと、国に与えた影響をいまだに軽く見ている」と確信する。また、手足を切断された人の運命も苛酷だが、シエラレオネの女性が受けた苦しみはおそらくもっと大きいと、同じように強い口調で言った。

「手足を失った者の苦悩は、目に見えないシエラレオネの苦しみです」と彼女は

続けた。「この国の女性たちに、目に見えない残虐行為が計画されました。それは、女性や少女を拉致してレイプ、集団レイプを行い、一部を殺人マシンに仕立て上げることで、シエラレオネの女性を服従させるという周到な作戦でした。犯罪行為を裁く時は、この隠された苦しみを絶対に忘れてはなりません。」

再び与えられたチャンス

フリータウンに、周りのものみなが小さく見える、樹齢何百年という見事な綿の木があり、その下に、「シエラレオネの人々よ、神が汝を愛する如く互いを愛せよ」と書かれた看板が立つ。この言葉に



は、国の未来に対する希望が込められている。内戦がこれほど野蛮だったにもかかわらず、この国は再びチャンスを与えられた。

内戦を長い間無視してきた国連が、平和回復支援のため、昨年末に国連平和維持軍総勢1万1100人の一部となるインドとケニアの部隊派遣を開始したのだ。

国連高等難民弁務官事務所(UHCR)もフリータウン事務所を再開した。ロメで和平協定が調印された直後にこの地域の担当官が集まり、平和回復に伴い、ギニア、リベリア、ガンビアにいる難民約17万人が2000年末に帰国すると

予測し対応策をまとめた。国内にいくつかの現地事務所を開設し、難民の帰還と再定着を支援する予定であった。

事態が最も順調に運ぶ場合を想定した「最良のシナリオ」の用意は必要だったが、楽観的過ぎたという結果になった。

国内には、強盗やレイプなどの「野蛮な行為」が横行し、UNHCRなどの人道機関の活動を阻む立ち入り禁止区域が数多く残っていた。

短期的には、何千人ものゲリラの武装解除が、平和への努力を続ける上で重要なカギとなるが、断続的にしか実施されていない。この記事の入稿時点で、数千人の兵士が武器の引き渡しに応じたが、まだ多

くの兵士が武器を所持しており、戦闘続行を断固主張するゲリラの「部隊長」もいた。

武器を引き渡しても約束の報奨金が支払われなかったと言う元兵士もいた。いちど武器を渡してしまうと、身を守るすべがなくなくなり、報復を恐れる兵士も少なくない。

コフィ・アナン国連事務総長は、和平合意の不安定さを認識し、2000年初めに国連軍を6000人から12歩兵大隊と支援部隊を含む1万1100人に増強するよう要請した。安全保障理事会は2月、この増強を承認した。

だがたとえ武装解除が順調に進んでも、膨大な数の難民を加えゲリラも再定着させなければならないという、困難で長期的な問題が待ちうけている。

何十万人もの難民と国内避難民はすべて、武装解除が完了したら一刻も早く故郷に戻りたいと願っている。経済的に最も恵まれない国の一つであるシエラレオネには、人材が必要なのだ。バングラ委員長は、こう語る。「彼らは技術を身につけて戻って来ます。難民キャンプで技術を身につけた人すらいます。彼らは故国に帰りたと思っていますし、国もそういう人々がぜひ必要なのです。」

ゲリラの将来となると話は別だ。これまで国際社会は、シエラレオネ内戦のような見知らぬ場所での紛争にわずかな資金と限られた時間しか割り当ててこなかった。この制約により再定着などの問題は、国際社会にとっては好都合だが、非現実的なスケジュールをあてがわれた。

近年、ボスニアやルワンダで証明されたように、戦争による精神的な傷は、身体的な傷をいやすよりはるかに長い時間がかかる。シエラレオネも例外ではない。

年少の殺人者

シエラレオネに住んで30年になるジョセフ・バートン神父は、昨年初めゲリラに20日間もの間捕らえられた。4人の修道女が殺されたが、彼はかろうじて助かり、現在、フリータウン近郊の海岸沿いにある、行楽地だった美しい場所で、約160人の子どもを収容するセンターを運営している。そこには、戦争の犠牲となった

ゲリラの烙印を 押されて

ギニアで難民生活をしていた29歳の鉱山労働者サールは、シエラレオネの村へ帰ろうと決心したが、途中で森の中に潜んでいた時ゲリラの一団に捕まった。一緒に捕まった友人は、すぐに銃殺隊の前に連れ出された。「おじさん、殺さないで」と嘆願したが、「俺はおまえのおじさんなんかじゃない」とゲリラに言われ、撃ち殺された。

この時捕まえたサールを含めて9人の一般市民をどうするか、ゲリラは仲間うちで激しく言い争った。「俺たちの手で殺さないで、カマジョール(政権よりの地元民兵組織)がギニア兵にやられるように、印をつけよう」と、一人が言った。9人は抵抗できないよう縛りつけられ、反政府ゲリラ「革命統一戦線(Revolutionary United Front)」の頭文字RUFを身体にカミソリで深く刻みつけられた。髪の毛は雑な十字模様で剃り上げられ、またマチューテ(細長いナタ)で打たれた。

その日、さらに8人が捕らえられ、同じように、胸や背中、額にRUFやAFRC(別組織のイニシャル)が刻みつけられた。一人が脱走すると、見せしめに二人が撃たれた。うっかりゲリラのキャンプに迷い込んだ別の脱走者は、その場で射殺された。

サールはなんとか逃げ出しギニアに向かったが、苦難はまだ終わっていなかった。ゲリラの思惑通りゲリラと間違えられ一晩中、自警団に金具付のベルトでむち打たれ蹴られ続けたが、かろうじて難民キャンプへ逃げ帰ることが出来た。



UNHCR / C. SHIRLEY

来るべき平和に備えて技術を身につける。(ポーにて)

子どもと、いく人かのチャイルド・キラー（子どもの殺人者）がいる。

子どもたちが住むバンガローの一つには「この家は、長年流された血に塗られている」という不気味なメッセージが書かれている。「殺人隊長」のあだ名で呼ばれる15歳の少年が不機嫌そうに、黙って訪問客をにらみつけた。少年は、自分が元ゲリラで、数えきれないほどの人々を殺

したと認めている。センターに来た当初は暴力を振るい、攻撃的で孤立していた。

7歳の時に拉致されたという16歳の少女は、「銃を使った」と認めるが、それ以上は何も答えようとしなない。

「今の彼らを見てみると、とても子どもとは呼べません」と神父は言った。センターを出て故郷の村 場所を覚えていればだが へ帰ろうとする子もいる。

だが村人に合わせる顔がなく戻ってくる子が多い、と神父は付け加えた。

しかし、神父は長年困難な状況を生き抜いてきた経験から、長い目で見た場合のシエラレオネの将来に対し楽観的な見方をくずさない。

わかりやすい比喻を使って、神父はこう言う。「いいですか、この子たちは、一番頑丈に作られた四輪駆動車なみのシヨ

両親と兄弟を殺され、レイプされて

1999年、首都フリータウンの一部が反政府武装ゲリラの攻撃で占拠された時、コンテー家は戦闘に巻き込まれ捕らえられた。一家の母親がゲリラに脅されたので、夫は妻を放してほしいと懇願すると、その場で射殺されてしまった。夫の惨殺で半狂乱になって泣き叫んだ妻も、武装兵に殺された。

二人の息子と十代の娘Aは、ゲリラが街から追い出された時に略奪物の運搬係として連行された。力尽きて崩れるように倒れた兄は、地面に倒れたままで処刑され、弟も隣家へ逃げ込もうとして射殺された。

Aの苦難は続いた。1999年の1月から3月まで、「P1」、「05」、「55」、「ダラミ

ー」としか分からない暴漢に、何度も集団レイプされた。捕らえられていた間、別の女たちが日常的に集団レイプされるのも見た。彼女は後に一般市民とゲリラ捕虜の交換で解放され、ようやくギニアにたどり着いた。

あまりに苛酷な目にあったため、彼女は今だに心理的に立ち直れていない。

ックアブソーバーを神様から授かって生まれてきたのです。だから、耐える力も立ち直る力もあります。けれども、社会復帰は一晩では無理です。ヨーロッパの人々が『文明人』になるのにどれくらいかかったか、考えてみてください。」

奥地にあるクバヤマ・センターでは、元少年兵の子ども17人が、家族の元へ帰る前に、基礎教育などの講習を受けていた。その大多数は一般市民を殺害した経験があり、麻薬中毒者である。センターに滞在できるのは6週間だが、もう一年になる子どももいる。この子たちが完全に立ち直るには、さらに長い時間がかかるだろう。

15歳のジョナサンは、8年前、ゲリラが村を襲って両親を殺害したときに捕らえられた。

「兵士たちは、僕にゲリラの訓練をした。銃もくれた」と彼は、淡々と話す。

「麻薬を使ったの?」「使った。」

「普通の人を殺した?」「たくさん。」

「悪いことだったと思う?」「戦争だったんだよ。命令されただけ。悪いとわかってた。やりたくてやったんじゃない。」

「ここが終わったら、何をしたい?」「軍隊へ戻りたい。軍隊で役に立つことを知っているから。」

新しいアプローチ

一時期、シエラレオネの内戦は一国だけの問題と見られていた。だが近年、UNHCRやその他の人道機関は、近隣諸国を含めた地域の問題として取り組もうとしている。

内戦を激化させた武器は、国外の武器商人からリベリアなどを經由して密輸入された。リベリア自体も、大規模な難民問題を抱えた国だ。(奇妙にも思えるが、1990年代のシエラレオネでの戦乱による荒廃にもかかわらず、およそ十万人のリベリア難民が故国の内戦を避け、危険を覚悟でシエラレオネ滞在选择を選んだ。)

ギニアはアフリカで最も多くの難民を受け入れている。多くがシエラレオネやリベリアから逃れた難民で、その数は合計48万9000人に達している。

ギニアは、自国の社会基盤が崩壊に瀕



手足を切断された戦争犠牲者たち。



している状況で、もはやこれほど多くの難民を好意的に受け入れられないと、国際社会に向かって大きな声で警告を発つようになった。

1998年にUNHCRは、中部・西アフリカ地域を担当する部署を設置した。人的資源や財源をより柔軟に、タイミングよく地域全体に配分するシステムを作り、

現地事業の再構成で、重複や無駄を省こうという狙いだ。

UNHCRは、さらに各国が負担を分担するという方針を打ち出した。これには、ギニアなどの難民受入れ国とその国民を支援するプロジェクトも含まれている。

世界銀行や国連開発計画 (UNDP) との協力により、UNHCRはまた、いわゆ

UNHCR / C. SHIRLEY AND R. WILKINSON

サンコーの いない シエラレオネは ない

武装ゲリラが村に迫ってくると、K村長は、女と子どもは森へ逃げろと命じた。そして80人の男たちが、寄せ集めた単発式小銃17丁とわずかな弾薬で家を守ろうとした。

武装ゲリラは村人がかなう相手ではなく、一帯はたちまち占領されてしまった。K村長は森に逃げ込み、モスク以外の建物がみな焼き払われるのを見つめていた。翌朝、焼け跡から村人二人の遺体を見つけた時に捕らえられた。

ゲリラたちは足を切りつけ「お前のイヤリングだ」と言いながら、右耳に南京錠をぶら下げた。

残虐行為はさらに続いた。ゲリラの指揮官はK村長が、有力な部族長の息子なので殺さない代わりに手の指を切り落とそうと決めたようだった。そうすれば「フォデー・サンコー（ゲリラの司令官）のいないシエラレオネはありえない」という大統領に対する警告文を、K村長に当局へ届けさせられるからだった。

また「愛国心はひとつ、シエラレオネもひとつ」の象徴だと言って、村長の親指は切らずに残した。

マチェータがなまっていたので、何度もK村長の手に振り下ろされた。村長が確実にほかの村にたどり着きゲリラの警告文を届けられるよう、指揮官が自らロープを止血帯代わりに、村長の手につく巻きつけた。



シエラレオネ国内のキャンプ。

るブルッキングス・プロセスに着手した。これはブルッキングス研究所（ワシントンのシンクタンク）から名付けられ、緊急人道支援と長期的開発とのすきまを埋める方法などを検証する。

さらに世界銀行、UNDP、UNHCRは「西アフリカの国内紛争の地域的広がりに注意を向けさせ、資金拠出国による紛争国別の対応が適切かどうか」の論議を進める予定である。

最近実施された西アフリカ地域調査の結果、上記三機関は、この地域には課題が山積しており地域全体としての取り組みは、期待されたほど進んでいない、と

表明した。報告書では、ギニアとリベリア間の国境は今も閉鎖され、政治的、軍事的な同盟が常に変わり「政情不安」の国もあるという。

これに加えて調査は以下の必要性を指摘している。(1)西アフリカの政治的指導者や元反政府勢力側の人物をもっと深く関与させる。(2)様々なグループ間で情報の流れを良くする。(3)難民に、いつどのように帰還すれば良いかを定められるように情報を行き届かせる。(4)すでに進行中の人道援助計画がより柔軟に行えるよう、そして重複しないよう調整する。

フリータウン周辺にある立ち入りので



UNHCR / R. WILKINSON

きない場所へのアクセスも確保しなければならない。また、関係機関は難民援助計画を統合し、政治状況

が安定し次第、難民が迅速に帰還できる計画を用意する必要がある、と調査団員は語った。また、帰還兵士の収入を確保する事業を起し、難民向けの低額融資計画の実施を勧めている。

調査団の報告書には「肝心なのは時間であり、これまでの平和に向けた努力が勢いを失って、問題解決の好機を逃さな

「今の彼らを見ていると、
とても子どもとは呼べません。」

いよう、できるだけ早くかつ迅速に計画を実施せねばならない」と記されている。

しかし、どのような計画が実行されようと、また国連平和執行部隊の兵士が何人配置されようと、バングラ委員長が指摘したように「完全に武装解除されて帰還兵が地域社会へ戻り、親兄弟に向き合う時が、本当の試練であり、私たちは、ただひたすら願い祈るばかり」なのである。

お前の傷を 大統領に 見せてやれ

1999年の末に、Sはスマウォリアの町でゲリラたちに捕らえられた。彼女は荷物を奪われ、次に一緒にいるよう命令された。明らかに性的目的のためだった。ここにいるくらいなら死んだほうがまだ、と彼女が言い張ると、一番若いゲリラに力づくで地面に座らされた。

そして足を切り株の上へのせると命じられた。十代のゲリラが足をマチェーテで切り落とそうとした瞬間、彼女は素早く足を引っ込めた。すると喉元にマチェーテが押し当てられ、足を出さなければ今すぐ殺すと脅された。

切り株の上に左足をのせると、若いゲリラは足の指二本を切り落とし、彼女に手渡した。そして、カバー大統領のところへ持って行け、政府を支持するものはこういう目にあうのだという警告を伝えろと命じた。

夜、ゲリラは彼女を置き去りにした。近くの小屋に隠れていた人たちが傷ついた足を洗い、出血を止めるため傷口に塩をすり込んで助けてくれた。そして彼女はハンモックで近くの町まで運ばれ、安全なところへ歩いて行けるようになるまで、獵師たちに1カ月程世話になった。

コソボ



UNHCR / H. GAUX

4 2月2日、コソボ自治州北部でUNHCRが運行するバスをロケット弾が直撃し、セルビア人乗客2人が死亡した。事件は、コソボ平和維持部隊が同地域を管理下に置いて以来、最悪の民族間の衝突を引き起こした。北部の町ミトロビツァでは、事件をきっかけにセルビア系住民とアルバニア系住民との間の衝突が続き、少なくとも11人が死亡、数十人が負傷した。UNHCRのバス運行は、地域住民の行き来を増やそうと始められたが、この事件で中止された。ユーゴスラビアのミロシェビッチ大統領は、コソボでの国連活動を非難。一方、事件の余波が続く中、ベルナルド・クシュネル国連特別代表は、混迷が続く同地域への援助を一層促進するよう国際社会に求めた。

シエラレオネ



UNHCR / C. SHIRLEY

3 内戦が10年近く続いてきたシエラレオネに、平和を築くチャンスが再び訪れた。凄惨な内戦は、何千人もの一般市民が無残に手足を切断された事件に象徴される。1999年7月、現政府と反政府勢力は、不安定な和平合意に調印し、総勢1万1100人の国連軍が派遣された。何十万人という難民・国内避難民は故郷への帰還を強く望んでいるが、それには、元反政府兵士の武装解除が先決である。しかし現在に至るまで、武装解除には手間と時間がかかり、あまり進展していない。

ブルンジ



UNHCR / R. WILKINSON

2 中央アフリカのブルンジでは、これまでに20万人を超える人々が、終わりの見えない戦争の犠牲となっている。少なくとも難民33万人が隣国タンザニアに流入し、数十万人が住んでいた土地を追われ、国内で避難生活を送っている（写真）。アフリカで最も尊敬されている指導者、ネルソン・マンデラ氏が紛争解決

決へ向けて調停役を引き受け、内戦の当事者たちを激しく非難したことで、停戦協議に多少の進展があったといわれる。ブルンジ政府は一般市民を収容していた通称「再編成キャンプ」の解体に同意した。しかし、これまでの和平努力にはつまづきを見せたものが多く、マンデラ氏の仲介が内戦を終了させる保証は全くない。

コンゴ（民主共和国）



UNDP

1 国連安全保障理事会はコンゴ民主共和国の不安定な停戦状態の監視するため5500人の部隊を承認した。500人の軍事監視団と、その護衛にあたる5000人の部隊からなる。コンゴの紛争はすでに周辺5

カ国をまきこみ、一部の識者が「アフリカの第1次世界大戦」と呼ぶ状況を呈している。米国政府は調停案を作成し、リチャード・ホルブルック国連大使が「行動すべき時が来た」と述べた。戦乱は地域全体を不安定化させ、新たに数万人の難民が生まれた。

3

セルビア



UNHCR / A. KAZINIERAKIS

5 UNHCRはセルビアでの活動を拡大しながら、ヨーロッパで最大規模の難民と国内避難民の双方を援助している。ボスニア・ヘルツェゴビナとクロアチアでの紛争によりセルビアには推定で50万人前後の難民が流入したとされ、さらに、コソボ自治州から逃れた20万人以上のセルビア人やロマ人が加わった。セルビアへ逃れた人々の支援にUNHCRは2000年度に7100万ドルの予算を計上。これには、セルビアにとどまると決めた難民を支援する定住計画の拡大も含まれる予定。一

方この数カ月間で、政府間の協力関係に好転のきざしが見え、長期間滞在していた難民が今までより多く帰国できるかもしれない(写真)

アフガニスタン



UNHCR / A. HOLLMANN

6 ハイジャックされたアフガニスタン国内航空の旅客機が、最終的にイギリス本土に着陸した。この事件によりイギリスだけでなく庇護希望者を受け入れている主な国々が警戒感を強めた。ハイジャックは計画的であり、首謀者グループとその家族がアフガニスタンを脱出し友好国に庇護先を求めることが目的だった、と関係当局は見ている。

アフガニスタンでは、写真の女性のように、何十万もの人々が住んでいた場所を追われ、さらに260万人が周辺の国々で難民生活を送っている。関係当局は、この事件がきっかけとなり、他の紛争地域で真似する者が出るのではないかと懸念する。

香港



UNHCR / A. HOLLMANN

7 香港政府は、香港に在留するベトナム人ボートピープルの最後のグループ1400人に対し永住を認めた。1975年以来、これまでに20万人を超えるベトナム人が香港を経由して第三国へ移住するか、ベトナムに帰国させられた。最後のベトナム人グループは移住先を見つけられず、本国政府にも帰国を拒否されていた。ある政府高官は、「彼らが社会の有益な一員になるのが早ければ早いほど、香港にとって望ましいのです」と述べる。

忘れられた国への訪問者

ギニアは世界最貧国のひとつ。だが、アフリカで最多の難民を受け入れている。

コリーヌ・ベルチュイ

1999年の春、メンサ・クボニョンは西アフリカ、ギニアの町マセンタに着任した。当初、リベリア国境に近いこの町での彼の仕事は簡単に終わりそうだった。UNHCRの上級職員として、地域内にいるリベリア難民12万人の自主帰還を支援、完了させ、事務所を閉鎖すればよかった。

ところがリベリアに新たな騒乱が発生、国境が閉鎖された。帰還計画は突然中止となり、クボニョンは新たに流入するリベリア難民の受け入れに追われた。

「もともと本国に帰還する人々の待機施設として作られたキャンプに、8千人もの新たなリベリア難民を収容しなければなりませんでした」と彼は振り返る。事務所を閉じるどころか、2000年早々、彼は他の職員と共に新たな難民を治安の悪い国境地域からギニア国内に50キロ入った場所に移す作業を行った。

マセンタのフィールド職員が直面した突然の変化は、ギニアが抱える、世界でも有数の、困難で複雑極まる難民問題を示す象徴的な出来事だった。

この国は、アフリカの最も不安定な地域の中心にあ

る。隣国のシエラレオネとリベリアは長年にわたる戦争で荒廃し、何十万もの人々が安全を求め周辺諸国に流出した。

ギニアは最貧国のひとつだが、アフリカ諸国で最多の難民シエラレオネ難民とリベリア難民を中心に48万9000人を引き受けている。

「(これほど多くの)難民の存在は、ギニアのような貧しく、世界から忘れられ

た国にとっては負担が大きすぎます」とUNHCRギニア事務所副代表のクリスティーヌ・ムーニユは言い、さらにこの国の難民の多さは、ギニア政府、この地域で活動するUNHCRなどの人道組織が直面する多くの複雑な問題のひとつにすぎないことも強調した。

多数の避難民を貧しい国が受け入れている以上、国際的な同情が集まって然るべきだ。しかしギニアでの事業は、多くの資金拠出国から「魅力的」とはみなされず、他の地域と比べ援助の手が差し伸べられることは少ない。

誰も知ろうとはしない

ギニアの状況に関心を持つ人はまずいません」とムーニユは言う。「活動資金の調達は困難で、常に経費の削減を迫られます。」

政府と700万人の国民は、国内にこれほど多数の外国人の中にはこの国で何年も暮らしている者もいるが在住する状態に対し不満の声をあげ始めた。

多数の難民がいるせいで国の限られた資源・財源がひどく圧迫され、広い地域

で環境が悪化し、国の安全すら脅かされているのに、配分されたわずかな援助金は、同じように援助を受けるべき地元民には分配されず、「滞在者」に振り向けられる。これがギニア人たちの言い分だ。

難民問題部門を管轄するザイヌール・サヌッシ内務大臣は「難民と地元住民の双方を支援する援助が不可欠」と最近のインタビューの中で主張した。

難民を生み出している近隣諸国の政治・軍事面での急激な変化、ある集団が必要とするものが他の集団とは異なる、といった要因が長期にわたる人道活動を非常に困難にしているだけでなく、時に

世界でも有数の、
困難で複雑極まる
難民問題。



学校建設へ向けて日干しレンガを作る難民。(フォレカリアにて)



UNHCR / R. WILKINSON

UNHCR / B. NEELEMAN



ゲケドゥ近郊のキャンプで水を汲むシエラレオネ難民女性。

は不可能に近い状態に追い込んでいる。

ムーニユはこう説明する。「現在、私たちは、特に(シエラレオネからの)手足を切断された人々や弱者である女性や子どもを支援しています。また、ここに来てから2年以上になる人々への援助を凍結している一方で、西部と南部地域には新たな難民が続々と入ってくる状態です。」

シエラレオネでは、元反政府兵士の武装解除が進行中であり、UNHCR 事務所は難民37万人の本国帰還計画を用意しなければならない。だがその間にも、攻撃を受けやすい国境地域にある難民キャンプを、もっと安全な場所へと移動させるために、貴重な資金を転用しなければならない。

「2、3カ月後には帰還するのに、また新しいキャンプに移動させられ、一から生活を始めなければならない。難民は疲れきってしまう」とムーニユは話す。だが、どんなに費用や時間がかかっても安全は確保しなければならない、と彼女は言う。しかし現地の状況はかなり不安定であり、UNHCRの帰還計画も、新たに流入してくる難民対策に変更される恐れがある。

難民の中心地

ギニア、シエラレオネ、リベリアの三国は、「フォレストリー・ギニア(ギニア森林地帯)」と呼ばれる地域の町ゲケドゥ近くで国境を接する。この10年間、同地域では、何十万もの人々の波が押し寄せ、そして引いていった。国道が国境沿いに100キロ以上にわたって平行に走っている。その100キロに、地元民の村と難民キャンプが混在するようになった。戦乱から脱出してきたリベリア難民が最初に住み着き、その後、同様の残虐行為を逃れてきたシエラレオネ難民が続いた。

政治、軍事面での急激な変化は、長期的な人道活動が極めて困難にするだけでなく、時には不可能に近い状態に追いこんでいる。

数年前に来た「古参の難民」はすぐにわかる。すでに日干しレンガのしっかりとした家を作っているからだ。国道沿いに進むと、最近到着した難民が住んでいる新しく白いテントがある。非熟練の仕事をしなが、首都コナクリのような都市に住みついてしまった人たちもいる。

1999年7月に、シエラレオネの政府と反政府勢力は、和平協定に調印したが(特集参照) 難民たちは半信半疑だ。全



難民に配給される食糧。(フォレカリア)

UNHCR / C. SCHÜRPF

での当事者が完全に武装解除されるまで、故国へ戻りたくないのだ。

時間をうまく使っている者もいる。17歳のレデンブタは1カ月間森の中を歩き続け、残虐なゲリラから逃れてきた。ギニアでは勉強を続ける機会が持てた。「(祖国の)村にいれば、母さんの手伝いで家にいなければならなかったけど、ここではフランス語の授業が必修だから、国に戻る前にう

まく話せるようになりたい」と言う。

ジムの境遇はもっと悲惨だ。子どもたちがバレーボールやサッカーをしている時、サナドウの第三キャンプにあるレジヤセンターから遠く離れた小屋に、十代の少年5人と隠れるように暮らしている。かつて彼は、近年のアフリカ史上最悪といえる恐怖支配に加担したゲリラ組織の少年兵士だった。

「大人の兵士が、ぼくに悪いことをさせた。敵のカマジョール族を殺させたんだ。やらなきゃ、ぼくが殺された。友達が何人か殺されるのを見たよ。言うことをきかせるために、バリウム(精神安定剤)やマリファナをくれたよ」と語った。

ジムが殺した人々の友人や親戚がキャンプで暮らしており、少年たちが殺人者だとわかれば、間違いなくリンチにあうだろう。

「突然ひどく凶暴になったり、何時間も横になったまま虚脱状態だったりします」と彼らを監督しているミカエル・ンガオジオは言う。「いつかは家族や親戚を見つけてやりたい。でも、ほとんどの子が母親の顔さえ覚えていません。両親を殺されてしまった子どもも多いのです。」

この記事の執筆中、リベリアがギニアとの国境開放に同意した。この進展とシエラレオネでの和平協定調印が、難民たちと、忍耐強く受け入れ役を努めてきたギニア国民に希望を抱かせている。

ゲケドゥの警察官の一人はこう言った。「我々は難民を家族や同胞と思い、快く受け入れてきました。親しみを感じるあの人たちにも幸せになってほしい。それには祖国で暮らすのが一番です。彼らの滞在は長くなりすぎました。」



UNHCR職員と話し合う難民。(フォレカリア近郊のセンター)

UNHCR / C. SHIRLEY

ここはいったいどこ？

遠く離れた意外な場所に、安住の地を見出した難民



UNHCR / R. WILKINSON

レイ・ウィルキンソン

祖国南ベトナムから1979年に脱出した後、自らの移住先の国に着いたグエン・バン・ホーの衝撃は大きかった。樹木が全くなく、人を寄せつけないような溶岩大地や火山、氷河を見た彼の第一印象は

「ベトナムを逃げ出して、月に来てしまった」

20年後、混乱状態のバルカン半島から来た37歳のズラブコ・プラニーズの感想も似たようなものだった。「ここは火星だろうか？」

ふたりとも、いくぶん仕方なく、そして意外に思いながらも、アイスランドを安住の地としている。アイスランドは北ヨーロッパとカナダと北極にはさまれ、美しいが荒涼としたフィヨルドと山岳地帯からなる島だ。マレーシアの難民キャンプで視察団に移住の意思を聞かれるまで、グエンはアイスランドの名前さえ知らなかった。プラニーズは、スイスかドイツへの移住を希望したが認められず、1998年

**アイスランドは
世界の難民受け入れ国の
中で、
特異な存在である。**

6月、妻と二人の娘と共に空路、首都のレイキャビックに向かった。

世界の難民受け入れ国の中で、この国は特異な存在であり知名度も低い。大部分の難民はグエンと同様に、国名すら聞いたことがなかっただろう。また、人道援助関係者の中でさえ驚きの声を聞く。「アイスランド？ 難民？ 冗談でしょう」

アイスランドは1956年のハンガリー革命以来、故郷を追われた人々からなる小さな集団を迎え入れている。1979年に、グエンを含む、南ベトナムから逃れた34人のポートピープルがここで新しい生活を始めた。10年後、今度は香港の難民キャンプにいたベトナム北部出身者を中心とする別のグループがやってきた。

中央ヨーロッパで、表面的には堅固に見えた共産主義圏が崩壊し始めた1980年代にこの島はポーランドからの難民を受け入れた。1996年から3年間は、1995年の戦争で祖国を追われたクロアチア・ク



コソボから来たカップル。
新居の前で。

ライナ地区出身の、主に異民族間結婚したセルビア人グループが受け入れられた。1999年にはコソボから80人ほどの難民がやってきた。

大きな影響

受け入れた難民の数は少なく見えるかもしれない。だがアイスランドの人口はたった27万5000人で、一人当たりの比率で見ると、この国が受け入れたコソボ難民数はアメリカで7万人以上、イギリスで1万5000人ほどを受け入れたのに匹敵する。難民と単一民族のアイスランド人双方が受けた社会的・文化的影響は、おそらくどの国よりも顕著だろう。

ポール・ペトルソン社会保障大臣は、政府はこの先何年かは引き続き難民を受け入れる予定だ、と述べた。最近の本誌とのインタビューで「私たちには難民を迎え入れる義務があります。快く迎え入れ、社会に溶け込んでもらえるように、第1級の努力をしています」と述べ、アイスランドの人々が共有しているである

UNHCR / R. WILKINSON



1979年に来たベトナム難民。首都レイキャビクで仕事仲間と。

う自負心をのぞかせた。

アイスランドの難民の受け入れは、単に「第1級」なだけではなく、世界の他の国々と比べると、デラックスとも言える。ヨーロッパの多くの国々でのコソボ難民受け入れは一時的なものにとどまり、難民として入国する時の法律的・物理的な障壁が、事実上、ますます高くなりつつある。

「いったん入国すれば、彼らは一生ここにいてもいいのです。」ペトルソン大臣はこう話す。難民は無料で医療が受けられ、生活を始めるのに十分な準備金を支給される。地域社会とアイスランド赤十字が、ベッドや冷蔵庫から子どものおもちゃにいたるまで用意したアパートか小さな家を提供する。

また、全員が一年間アイスランド語の習得クラスを受けられ、子どもたちは、母国語と母国文化の学習を続けるよう奨励される。地元の「サポート・ファミリー」は、ショッピングから教会の紹介や仕事探しまで、あらゆることを手助けしてくれる。

5年たつと、難民は公民権を申請できる（奇妙に思えるが、申請時にアイスラ

ンド名をひとつ取り入れなくてはならぬ。グエン・バン・ホーはレイキャビク地方の自治体で整備士として働いているが、正式には現在、ハルドール・グエンという名前だ）

出会いから始まるショック

異文化に対するショックは、難民とアイスランド人が始めて出会った時に始まる。ある職員は、最初のやりとりを思い出してこう言った。「ある男性に周囲を海



仕事風景（レイキャビク）

UNHCR / R. WILKINSON

に囲まれたアイスランドの地図を見せたら、東でも西でも一番近い国の名をとっても知りたがりました。別の男性は、ここではみな雪の家に住んでいると思い込んでいたのですよ。」

1999年の始め、ベッセル・ベセラージュと妻と5人の子どもは、コソボで、悪名高い「難民列車」に詰め込まれた。そしてマケドニアの難民キャンプで、アイスランドの赤十字視察団に出会った頃には、すっかり無気力になっていた。ベッセルは未知の国に行くのは気が進まなかったが、友達がインターネットでアイスランドを調べてこう言った。「正気かい？ここに比べたら天国だぞ」。次の日、ベッセルと彼の家族は、赤十字社のチームが来るのを待った。

ベッセルたちは、最終的に、北アイスランドの町ダルピクに落ち着いた。多くの人々が、世界の果てに来た、と思うような場所だった。連なった山々が、雪崩の危険を伴いながら、2300人が暮らす明るい色のペンキに塗られた家々の上にそそり立っている。遠洋漁業の船が港に沿って並ぶ。深いフィヨルドが外洋に続いている。次の停泊地はまさに北極だ。ここでは多くの日に雨が激しく降り、強い

風が吹きすさぶ。夏はほとんど一日中大陽が沈むことなく、冬は24時間、薄明かりと暗闇だけといってもいい。

この過酷な気候に順応するのに苦労する難民もいる。ある移住者が最近、屋根を修理しようとして、運悪く強風に吹き

化的に活気づいている。最近まで、この国には外国料理のレストランは1軒もなかった。今ではレイキャビクだけでも、難民が始めた10軒ほどのベトナム風中国料理の店がある。「10年前にはまったく知らなかった料理を食べています。おかげ

で私たちの食習慣が変わりました」とペトルソン大臣は話す。

あるセルビア人移住者が、2年ほどかかって編集したセルビア語とアイスランド語の辞書が間もなく発行される。

この北方の天国にも、確かに問題はある。インドシナ戦争下で敵同士だった「南」と「北」の

ベトナム人の中には、いまだにお互いを警戒の目で見える人々もいる。1990年代の中ごろに来たセルビア難民は、アイスランドが1999年にコソボ難民を迎え入れた時に「非常に驚き、傷ついた」

赤十字は、自分たちを受け入れてくれた国に、「裏切られた」ような不信感を抱いたセルビア人を落ち着かせようと、緊急の会合を開いた。赤十字の職員はこう語った。「この国はNATOのメンバーであることには変わりありません。NATO軍はコソボを爆撃していましたから、セルビア人たちには非常に居心地の悪い時期だったのです。」

アイスランド政府は、問題が起きないよう、大半のコソボ人がセルビア人から遠く離れた場所に住居を構えるよう慎重に事を運んだ。とはいえ、ペトルソン大臣も当時の事態の深刻さを認めて現在こう述べている。「あの状況にはかなり心配しました。でも、何も起きませんでした。もう

大丈夫でしょう。」

急速な発展をとげた経済が停滞し、仕事が少なくなると、今日ほど好意的に難民を受け入れなくなるかもしれない、と心配する人が国民の中にも難民の中にもいる。

これは将来への心配だが、42歳のイスメット・クラスニキと彼女の4人の娘、そして幼い息子は、世界中の難民がしばしば直面するジレンマに悩んでいる。1999年の始めに、セルビアの治安部隊が、コソボの村を突然攻撃してきた時、クラスニキと子どもたちは夫から引き離された。苦労してマケドニアに逃れ、その後アイスランドに移った。夫は山中に逃げ込んだ。お互いに長い間、みな死んだものだと考えていた。

「私の人生はこの国で再び始まりました」と、ダルビクの町はずれにある、こじんまりした平屋建ての家で彼女は話してくれた。子どもたちは学校に通っていて、自分もここに留まりたいと思っている。ところが最近になって、やっと連絡がついた夫は、コソボにとどまりたいと言う。

「私は戻りたくないのです」と彼女は静かに言った。

しかし、14歳になる娘のサディットの言葉が最も端的に家族の気持ちを表している。「ここで暮らしたい。でも、アイスランドよりお父さんが欲しい。」



UNHCR / R. WILKINSON

国会議事堂（レイキャビクの中心街）

飛ばされて屋根ごと海に落ちてしまった幸い命に別状はなかったが。

ベッセルは、ダルビクの町はずれの、寝室が3つある二階建ての青い家で、気落ちした様子もなく語った。「アイスランド人はこんなに暗い所でも楽しく暮らしています。私たちだって幸せですよ。コソボでは、子どもたちは神経質で乱暴でした。しつけどころか、学校だって何カ月もありませんでした。ここに来てからでも、制服姿を見ると『あの警官たちは誰かを殺すの?』と尋ねるのです。でも、顔には明るさをもどって

きました。楽しく学校へ通っています。私たちはイスラム教徒ですが、地元の教会へ時々行きます。問題ありませんよ。神様はひとりだけですから」と彼は話す。

食べ物は問題かもしれない。何年か前まで、アイスランドは極端な島国社会で、外国からの客にも臭気の強いサメ肉や羊の頭の料理を出してもてなしただろうから。

外来文化へのめざめ

今日では、難民の流入と現在の好調な経済のおかげもあって、アイスランドは文

異文化に対する ショックは 難民と アイスランド人が 始めて出会った 時に始まる。

UNHCR / R. WILKINSON



首都にある教会



故郷に到着した東ティモール住民（ディリ）

UNHCR / M. KOBAYASHI

帰郷 新たな苦悩の始まり

かつての隣人は
容易に受け入れてくれない

ポール・ストロンバーグ

アルベルトは、設立されて間もない文民警察が本部とするディリの建物で、子ども用学校机に座り、取り調べを始めるのを辛抱強く待っていた。独立反対派民兵との疑いをかけられている男の話は、ほかの帰還民の話とよく似ていた。

1999年6月、東ティモール独立を支持する住民投票直後の混乱した数週間に、自分の家から逃げ出したり、追い出された多くの住民は少しずつ故郷に戻りつつある。この容疑者は帰還した当日、自分の家の近所を歩いているところを、ディリを恐怖のどん底に突き落とした反独立派の民兵だと疑われ、警察官がかけつけた時には殴り倒されていた。

UNHCR保護官補のアルベルトは、真相究明と対策を立てるため助け求められていた。容疑者のルイス・スアレスが取り調べ室に入ってくると、アルベルトはほっとした笑みを浮かべた。「これは簡

単に片付きそうだ。彼には見覚えがある。この男は民兵ではなかった。」

自分が父親と妹と共にディリの自宅に戻ると、すぐに4人の男が押しかけてきた、とスアレスはその時の様子を説明した。コーヒーを勧めたが、男たちはそれをはねつけ、かわりにスアレスに殴る蹴るの暴行を加えた。そして、男たちは、スアレスのいとこたちが反独立派民兵で、ディリでの大量殺人に関わっていた、と言い張った。

スアレスが暴行された話が事実であると確認すると、複雑な仕事が出ていた。公正な調停者として、深い疑念を抱く地元民とスアレスとの仲立ちをし、精神的に深く傷ついた地域社会に彼を再定着させることだった。

投票直後の大量の難民流出、それに続く、殺りく、破壊、難民の帰還開始などは世界中の注目を集めた。だがこのような調停の仕事はほとんど知られていない。調停の任務は非常に骨が折れ、人手も費用もかかる地味な活動だ。しかし、無防備な状況に置かれた人々に、法的・身体

的保護を与えるというUNHCRの中核となる任務である。UNHCRはティモールで多くの調停作業を行った。

危険な人物ではない

アルベルトの仕事は、まず国連からの委任を受けた文民警察部隊に、スアレスが地域社会にとって危険な人物ではないと納得させることだ。次に、スアレスが住む地域のリーダーや、発足したばかりの地域行政組織の代表者に会い、スアレスのように元反独立派民兵だとの疑いをかけられている帰還民、あるいは実際民



来るべき平和に備えて、UNHCRが提供した建築資材。

兵であった人々を再定着させるよう協力を依頼しなければならない。

「元民兵たちは、シャナナ・グスマンのような指導者からの呼びかけに応じて、東ティモールへの帰還を徐々に始めている」とディリのUNHCR上級保護官クリスティナ・プラナスは語る。しかし、いつまた表面化するかもしれない根強い敵意の中で彼らは生活している。

東ティモールの司法制度はまだ計画段階にあり、殺人や犯罪の容疑者を拘留・捜査・起訴する能力はない。だが深い精神的苦痛をつい最近味わった地域住民には、爆発寸前の、強い怒りがうっ積している。

「放火の嫌疑をかけられている男が、ある日、ほかの帰還民と一緒にトラックから降りてくる。それを見る村人の気持ちはよくわかります」とプラナスは言う。だが彼女は「今は、どんな疑いをかけられても、彼らにはほかに行く所がないのです」とつけ加えた。

UNHCR保護官と地元当局は、このように交錯する感情や問題の間に立って調停策を見い出さねばならない。「私たちは、人々を帰郷させる方法、そして彼らの権利が尊重される方法を見つけねばなりません」とプラナスは語った。同時に多数住民のうっ積した怒りに理解を示さなければいけない。

スアレスが暴力を振るわれたような事件は、判断を早まった際の危険を象徴していると、担当官たちは、住民の家やディリ中の集会所、ディリ以外の町や村で開かれた集会で、何度も説いている。住民による復讐があってはならないからだ。アルベルトは、スアレスの件と同じように、帰還民が保護されるという約束を地域の人々からとりつけるため、辛抱強く骨の折れる努力をしている。



調停活動を始めるUNHCR職員。帰還民を市民社会に復帰させる努力が続く。

UNHCR / P. STROMBERG

保護するのは人々であり、犯罪ではない

「我々は、忍耐強さを説いているのです」と地元弁護士のアントニオ・ゴンカルベスは言う。「我々が保護しているのは犯罪ではなく人間なのだ、ということを明確にしているのです」。ゴンカルベスはただの調停者ではない。1986年に、インドネシア政府によって、独立運動のことで投獄されるが、亡命中に法律を勉強し、1997年、獄中のティモールの指導者シャナナ・グスマンの弁護団に加わった。そして、昨年12月にティモールに帰還した。

近所に住む、嫌疑をかけられた三人の帰還民のために、オーストラリアの平和維持部隊に仲介を頼んだ後で、彼は言った。「犯罪者と思われている人々に手を貸すのは、不思議なことではありません。ティモール再建のために、東ティモールの全住民を再定着させるのは、当たり前的工作です。」

この仕事では、個別のケースごとに、かつての隣人と話し合う。元民兵と疑われている人物が帰ってきそうな場合、地域住民の意見に耳を傾け、予期できる地

元民の敵対感情を押し量りながら、根気よく対話する。同時に、こうした集会は、民兵の帰還についてティモール住民が抱えている危惧を訴える機会ともなる。

都市では数百人の集会もあるが、たいして混乱なく進行する。最近の集まりで地元担当官は「国際社会は、東ティモ

ルへ帰還してもこの地区へ帰ることを許されない人物も含め、すべてのティモール住民を保護しなければならない」と訴えた。これを支持して地域指導者のジョージ・クラウディオは「嫌疑をかけられた者を受け入れないのは非人道的行為をした独立反対派と同じではないか」とつけ加えた。

訴えの甲斐もなく、この集会は、賛同を得られないまま解散した。UNHCRや地元担当官は、数日後に再び集会を開くつもりだが、この元村人を受け入れてくれそうな別の地区を、すでに探し始めている。

一方、スアレスは帰宅し、地元指導者や隣人たちと、玄関前のポーチに腰を下ろした。UNHCRのアルベルトが会合の目的を説明する。全員が意見を述べ、最後は同意に頷いた。ルイス・スアレスは、ようやく故郷の村に再び受け入れられたのだ。

この仕事は
非常に骨が折れ、
人手も費用もかかる
地味なものだが
UNHCRの
主要任務である
保護活動
そのものなのだ。



UNHCR / P. STROMBERG

UNHCR に任せておくには重大すぎた難民問題

コソボ危機調査報告書による
多様な意見

1999年のコソボ危機は、UNHCRの50年近い歴史の中で、おそらく最も複雑な緊急事態だった。11週間という短期間に、ほぼ100万人がコソボ自治州から流出、そして帰還した。かくも大量の難民流出・流入 脱出と帰還 がこれほど短期に展開する事態に、UNHCRが直面したことはなかった。一方この緊急事態の人道側面は想像を絶する規模だったにもかかわらず、主要大国の国益や地域機構、NATO初の実戦介入などの政治的・軍事的事情におされ、すっきりかすんでしまった。

UNHCRは、この特異な事態を教訓とするため、第三者機関に報告書の作成を依頼。その結果を先ごろ公表した。141ページにおよぶ報告書は、UNHCRが今回、いくつかの点であまりよく機能しなかったと指摘する従来の批判 変化する状況への対応の不備、不十分な緊急援助物資、上級担当官の派遣の遅さなどを裏付けた。報告書は同時に、当時の状況や諸条件を考えれば「UNHCRの活動を制約した多くの要因が、UNHCRの力の及ぶ範囲を越えた所にあった」としている。また、他機関との調整、難民の保護と登録、実際の救援活動などに関する評価では、批判をする側はこれらの問題の複雑さを無視したか、過小評価したとしている。そして報告書は「主要大国は、この危機で発生した難民の運命が、自らの国益にとってあまりに重大となったため、UNHCRだけでは任せられないと判断した」と結論づけている。

UNHCRは指摘された問題点の大半を

認め、戦略的計画の立案能力、リーダーシップ、大規模な緊急事態に対する即応力などの強化に着手している。

コソボ危機全体からすると、NATOの空爆開始以前、そして難民のコソボ帰還後もUNHCRは数十万のコソボ住民の救援に大きな役割を果たした（報告書では空爆期間だけが調査対象）。空爆の最中でさえ難民に対し適切な援助を実施し、人々の死亡率は同様な緊急事態のものを下回った。これらの事実は特筆に値する。

ここではいくつかの主要問題を取り上げた。質問に対する回答は報告書、あるいはUNHCRの答えを抜粋したものである。

Q. コソボ危機全体の中に、UNHCRの活動を位置づけることはなぜ重要か。

A. 政治的に見れば、今回の事態は現在の国際関係の中では例を見ない出来事だった。ヨーロッパ主要大国の国益や強大な地域機構、そして軍事行動がかかわった。このような状況で難民問題が、戦時における外交上、重要な要素となり、その結果、

UNHCRの任務遂行に及ぼす多くの要因が、UNHCRの力の及ばない範囲のものとなってしまった。

Q. 緊急事態が政治化した結果、どうなったか。

A. 莫大な資金が集められたが、UNHCRにはわずかな資金が回されたにすぎず、主要拠出国とUNHCRとの交渉の成果もさまざまだった。欧州連合(EU)の拠出金上位6カ国は人道援助に2億7900万ドルが割り当てた。しかしUNHCRへの直接配分額は、その3.5パーセントにすぎなかった。



缶詰の食糧の配給。1999年4月、アルバニアのクセスに到着した難民に。

Q. UNHCRと他の関係機関の間にはどのような考え方の違いがみられたか。

A. 最も重大な違いは、マケドニアでの1次庇護に対する基準だった。UNHCRは、無条件の1次庇護（難民が最初に到着した国で庇護を求める権利）を強く主張した。しかしアメリカやイギリスは、難民の存在が国内を不安定化するというマケドニア側の懸念に同調し、大量の難民の滞留によってマケドニアがNATOの軍事活動への支持を撤回するのではないかと懸念した。

Q. UNHCRは期待に応えたか。

A. 政治と難民問題が絡み合った結果、UNHCRに対し多くのことが要求され、さ



スタンコベツ第2キャンプの難民(1999年4月、マケドニア)

UNHCR / H.J. DAVIES



UNHCR / R. CHALASANI

らに活動が制約される状況になった。UNHCRへの期待と現実とのギャップが埋めがなくなり、UNHCRは目的を達成できなかったという批判が高まった。

Q. UNHCRが受けていた対外的および組織内制約とは。

A. 対外的制約としては、UNHCRをほとんど通さず活動に対し直接資金を出す拠出国・機関、人道的活動と軍事・政治的活動の区別のあいまいさ、人道的な活動でのNATOの強力な役割と戦略、難民受け入れ国政府の消極性、組織間の複雑な対立関係、そして緊急事態に集まる世界の厳しい目、などであった。組織内制約は、緊急事態に即応できる人員・資金・物資の限界、不適當な意志決定システム、限られた資金的・人的資源、最近の組織再編、注目されるような緊急事態に必要な特別な配慮への対応不足などであった。

Q. UNHCRは危機を予測すべきだったか。

A. UNHCRは、今回の危機における難民の国外流出の規模とスピードを予測できなかったが、この事態は予測できるものでもなかった。また流出を予測できたと主張した援助機関はなかった。

Q. UNHCRは自らの援助基準を満たしたか。

A. UNHCRの緊急事態用の物資備蓄量は目標の25万人分を下まわり、緊急事に即応するチームの派遣決定も迅速とはいえなかった。しかし、難民に対し、おおむね必要十分な援助ができ、難民の死亡率も緊急事態時に一般的に認められている境界値を大幅に下まわった。また、伝染病の深刻な流行もなかった。

Q. どうすればUNHCRの援助を改善できるか。

A. 援助の供給能力を現在の基準に合わせるよう改善すべきである。UNHCRが他機関への協力を働きかけ、他の機関例えば世界食糧計画(WFP)が行なったほうが効率的な活動に関してはその機関ともっと密接に協力するか、時によっては活動を委任する。また、UNHCRは、政府や組織との即時対応契約や、包括的救援活動などの協力関係の可能性を考えるべきである。

Q. 人員派遣の問題とは。

A. 職員の派遣が全般的に遅く、現地活動で最も必要とする中堅管理職員に欠け、いくつかの主要なフィールド職には欠員が出ていた。また、重要な外交上の問題に対応できる上級職員の数が不足していた。

Q. UNHCRは、調整任務を果たしたか。

A. 職員派遣に問題があり、UNHCRが行なうべき調整任務を十分に果たせなかった。同時に、国際機関を通さない二国間援助が大勢を占め、また非常に多数の機関が関与したため、全体の調整が極めて困難であった。UNHCRは、正式な主導機関ではなく、非公式な主導機関として認識され、各国政府や約250のNGOのなかでUNHCRの調整に自発的に応じた機関との調整しか果たせなかった。

Q. UNHCRの保護任務はどうだったか。

A. UNHCRは、困難な状況の中で、国際的保護を与えるためにかなりの努力を払った。利害関係がNATOの軍事行動とは一致するが、国際的保護基準とは必ずしも一致しない主要拠出国はUNHCRにかなりの圧力をかけてきた。ある拠出国は、マケドニアの社会が(難民の流入により)不安定化する恐れにUNHCRは十分配慮していない、と非難した。また、いくつかの人権組織は、難民の保護組織としてUNHCRはマケドニア政府に十分な圧力をかけていない、と非難した。UNHCRは、状況の許すかぎりその任務を果たしてきた。

Q. UNHCRによる難民の登録作業はどうだったか。

A. 難民登録に対する圧力は、通常の登録作業とは全く異なった問題から生じてきた。援助の供給よりも、離ればなれになった家族の追跡調査や、国籍を証明するための登録活動が中心となった。これが(作業の早期完了を求める)資金



UNHCR / H.J. DAVIES

NATO難民センター。新たに到着した難民のための施設(マケドニア)。

拠出国の無理な要求につながった。UNHCRが、11週間という限られた時間内に登録作業を完了させることは無理な要求だった。しかし、UNHCRの登録方式は修正されるべきであり、また、コソボ危機で試されたコンピューターによる最新の登録技術が改良されれば、保護活動への貢献となる。

Q. UNHCRは、なぜコソボで軍と協力したか。

A. UNHCRは純粋な人道組織として軍との密接な協力関係は結べないと考えられていたが、(軍との協力は)人命救助に不可欠であるとの理解をコソボでは得られた。同様に、国連が承認した平和維持活動では、軍隊との協力は理解を得られていた。

ベオグラード：セルビア人民兵組織の悪名高い指導者ジェリコ・ラズニャトビッチ（通称アルカン）が、ベオグラードのホテルで射殺された。

ティモール：難民約15万人が東ティモールに帰ったが、反独立派民兵らは帰還を妨害し続けた。

庇護を求めて

グルジア

国連安全保障理事会は、グルジアに駐留する101名の国連監視団に対し、7月末まで6カ月間の延長を承認した。同監視団は、ロシアや他の派遣部隊と共に、グルジア政府と同国から分離独立を求めるアブハジアとの平和を支える力になっている（本誌「難民」117号）。1992～93年の内戦では25万人をこえるグルジア系住民がアブハジアから逃れた。

ウガンダ

1999年12月にスーダンとウガンダの間で結ばれた合意が、国境地帯の長期紛争に終止符を打ち、一応の結果をもたらしている。10年間、ウガンダの北部・中央部でゲリラ行為を続けてきた「神の抵抗軍」によって誘拐されたウガンダ人21名のグループが最近帰国。これとは別に54人がハルツームで国連当局に引き渡された。「神の抵抗軍」はここ数年間に、1万人もの青少年を拉致してきた。

ボスニア

ボスニア系クロアチア人5人が、国連旧ユーゴスラビア戦犯国際法廷によって、人道に対する罪で有罪とされ25年から6年の禁固刑を宣告された。1993年クロアチア系住民がアーミチ村を襲撃し村民を殺害した事件で、この5人は約100人のイスラム系村民を虐殺した罪に問われた。被告らはイギリス人兵士によって逮捕され、1998年8月に裁判にかけられた。6人目の被告は無罪となった。

ブルンジ

平和を築く努力



マンデラ南ア前大統領が、ブルンジ内戦の調停を引き受けた。右はアナン国連事務総長。

尊敬を集めたアフリカの指導者のひとり、タンザニアの故ジュリアス・ニエレレ大統領は、極めて解決が難しいとされるブルンジの危機を解決しようと仲介を試みたが、芳しい成果をあげることができなかった。今また、もうひとりの抜きん出た指導者、南アフリカ前大統領ネルソン・マンデラが、アフリカ中部の小国ブルンジの国内紛争を終わらせようと調停者の役割を引き受けた。終息の兆しがまったくないブルンジの内戦では、これまで20万人以上が殺されている。ノーベル平和賞受賞者でもあるマンデラ氏は、南アフリカで初めて民主的に選ばれた

大統領あり、おそらく今日、世界中でも最も尊敬されている政治家だ。

調停を開始するにあたり、マンデラ氏はブルンジの政府指導者や政府軍・反政府軍兵士に対し激しい非難の言葉を浴びせた。最初の会議の席で「あなた方は、能力もビジョンもない指導者と思われていて平気なのか」と迫った。「西欧の人々が、（現在行なわれている残虐行為を聞けば）『アフリカ人はやはり野蛮だ。人間ならそんなことができるはずがない。近代国家の仲間入りをしなさい!』と言うだろう」。

1962年のベルギーからの独立以来、ブルンジは多数派ツツ族と、少数派で支配層のツチ族との断続的な戦闘に、数十年の間苦しめられてきた。戦闘が、ここ数カ月間で激化した結果、政府は約35万人の一般市民を「再編成キャンプ」に詰め込んだ。これは、政府軍がツツ族反政府軍の追討をやりやすくなるよう実施した策だが効果はなかった。マンデラ氏や国連安全保障理事会の圧力により、ブルンジはキャンプの撤去開始に合意した。しかし、何十万の国内避難民や、タンザニアに逃れた難民33万人の帰還を実現させる現実的打交渉には、まだかなりの時間がかかりそうだ。

ヨーロッパ

庇護希望者が急増

1999年にヨーロッパで庇護を求めた人々の数は、43万7400人となり、前年度比で、19パーセント増加した。庇護申請の絶対数が最も多いのはドイツの9万5300人。以下、英国9万1400人、スイス4万6100人となっている。国民1000人あたりの人口比ではリヒテンシュタインが16.3人で最高、以下、ルクセンブルグ6.8人、スイス6.5人となっている。庇護申請の数が、総人口

比で最も低かったのはポルトガルで、総人口の0.03パーセント、ヨーロッパ平均の三分の一にも満たない。増加率が最大なのはスロバキアで、昨年度は155パーセントの上昇となった。以下、リヒテンシュタインが126パーセント、フィンランド122パーセントとなっている。申請者の数が減っているのはオランダとスウェーデンで、1999年に13パーセント減。絶対数がヨーロッパ最

高のドイツは、前年度より3パーセント減となった。興味深いのは、国連による別の報告書が、ヨーロッパでは、次の25年間に500万人の人口減少が予測され、急速に高齢化する人口を支えるには、2025年までに1億6000万人の移民労働者が必要になると示唆したことだ。また、非労働者に対する労働者の比率も、同時期に半減するとされた。

国連：国連が、1999年の目標である救援資金22億ドルのうち14億7000万ドルを調達した。最大抛出国は米国、欧州連合、日本。

ティモール：東ティモールにおける子どもの難民のうち4分の1が、深刻な急性栄養失調に苦しんでいる。

ニュージーランド：同政府が、7月1日をもって、難民を含むHIV感染者全員の入国を禁じる、と発表。

ティモール：国連平和維持部隊が、オーストラリア主導の国際部隊から東ティモール治安維持の任務を引き継いだ。

クロアチア

難民の帰還なるか？

1991～95年の旧ユーゴスラビアを巡る紛争で、クロアチアから逃れた数十万の一般市民にやっとかすかな光が見えてきた。ツジマン大統領の死去後、新政府が「徹底して民主主義による改革政策を実行し、難民や国内避難民が故郷に戻るよう迅速な措置を取りたい」と表明したからだ。明るい兆しは、最近の議会選や大統領選の運動で、帰還問題が人道的・社会的問題と

して扱われたことにもあらわれている。これらの問題はツジマン政権下では、非常に微妙な政治問題とされていた。「私は（少数派であるセルビア系住民に対する）非難をなくすのに役立つなら、たとえ相手側がそんなそぶりを見せなくても、いつでも意思表示をする用意があります」と、新大統領スティベ・メシッチがあるインタビューで述べている。新政府は、クロアチア

とボスニア・ヘルツェゴビナから逃れた全ての難民に帰郷する権利があると表明している。また、帰郷を事実上妨げてきた差別的な法律を廃止させる、とUNHCRに言明している。ユーゴスラビア連邦共和国からのクロアチア系セルビア人3万6000人を含め、11万2000人がクロアチアに帰郷したが、約28万人が今だにユーゴスラビアと隣国のボスニアにいる。



新たな出発？

1995年にクライナ地区を逃れたクロアチアのセルビア系住民が帰還できる見込みが出てきた。

エリトリア

新たなスタート

東アフリカの国エリトリアで、UNHCRはほぼ3年ぶりに活動を再開した。1997年5月、スーダン東部からの難民帰還を、エリトリア政府は「不当な強要」とみなし、UNHCR現地事務所を閉鎖・退去させた。最近になって両国の関係が好転、6年間の国交断絶が解かれ、エリ

トリアは1月、スーダンの首都ハルツームに大使館を開設した。UNHCRの活動も再開され、難民の帰還計画が立てられる見込みだ。スーダンには15万人近いエリトリア難民がいるが、25年も前に脱出したままの人もいる。

庇護を求めて

中国

UNHCR

は、難民と認定された7名の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）市民を本国へ強制送還したとして、中国を非難した。13歳から30歳までの北朝鮮市民7人は食糧を求めて中国に入り、さらさらロシアへ国境を越えたところをロシア警備隊に捕らえられ、難民としての認定を受けた。しかし、ロシアから中国に戻された後、食糧を求めて越境する何千もの北朝鮮住民と同じであると見なされ、北朝鮮に送還された。

ベルギー

先ごろベルギーが、不法滞在者に対し

居住権が取得できる機会を一度だけ与えることにした。3万5000人～4万人から出された申請は、弁護士・判事・NGOからなる委員会によって審査される。申請者には、この数年間に難民資格申請をしたがまだ最終決定を受け取っていない者、滞在理由を人道の見地から証明できる者、重病の者、国籍または居住権を有する国にやむを得ない理由で帰還できない者、が含まれる。



マイクロソフト社のビル・ゲイツ氏と緒方貞子高等弁務官。先ごろスイスのダバスで開かれた世界経済フォーラムで。



セネガルに配置されたマイクロソフト社の携帯型「登録機セット」。

COPYRIGHT © MICROSOFT / P. SCHULER

技術移転

1999年始め、何十万人もがコソボから難民として流出し、苦境に置かれた。最も悲惨だったことのひとつは、セルビア当局が多くの難民からあらゆる身元確認の書類を没収・抹消し、彼らを「法的に存在しない人」に仕立てようとしたことだった。UNHCRは通常、難民がキャンプや受け入れ施設に落ち着いてから、食糧などの緊急事態援助物資を支給するために登録を実施する。今回の危機では短期間に大量の難民が脱出し、さらに身元を証明

する必要性も通常の難民危機よりはるかに大きかった。マイクロソフト社は同じ業界のヒューレット・パッカード、コンパック、セキュリット、スクリーン・チェックなどの各社と協力し、コンピューター、デジタルカメラ、サイン・パッド、特製のIDカード用プリンター、関連ハードウェアとソフトウェアから構成される「登録機セット」を開発した。大半の難民は、この画期的なセットが全施設に配備される前に帰還したが、改良されたソフトを

使って、実地テストが続いている。この値段2万ドル、重さ40キロのポータブルセットが専用発電機付きで100台UNHCRに提供された。数台が最近、西アフリカのセネガルに配備され、登録に役立っている。ここで働くUNHCRの情報システム・アナリストのヨリ・キムヤチは言う。「今までには、難民が登録に来なくてはなりませんでした。（登録作業は）時間がかかり効率が悪い事業だったのです。今では、私たちが直接、難民の所へ行けます。システムを組み立て仕事を始めるのに10分、操作も簡単です。マイクロソフト社は、技術スタッフも派遣して、プログラムをサポートする予定である。コソボでの経験から、UNHCRは登録手続きに一層の効率化が必要なことを認識した。このポータブルセットは、新たな目標達成に向けて大いに役立つだろう。

親善大使

アラブ世界で最も有名なショービジネスのタレントであるエジプトのコメディアン、アデル・イマムがUNHCR中東・北アフリカ地域親善大使になった。最近出演した映画『ハロー、アメリカ』が人気を博した60歳代のイマムは、俳優業と新しい仕事を兼任することになる。「親善大使として、私は三つの主要任務を果たすつもりです」と彼は話した。「世界中の難民地域を訪問すること、資金集めること、そして難民のために芸術関連のプロジェクトを進めることです。」

スポーツ援助

オリンピックのスピードスケートで3個の金メダルを手にしたノルウェーのヨハン・コス博士は、シドニー・オリンピックに時期を合わせて、「オリンピック・エイド」と呼ばれる人道募金グループを設立した。グループは一般市民と企業から、少なくとも500万オーストラリアドルを集めたいとしている。寄付金の大部分はUNHCRを通して難民の子どもたちのための教育・健康・

スポーツなどのプロジェクトに配分される。一部は今年6月、世界中の難民キャンプ12カ所で開催される「オリンピック・スポーツ・デー」の支援に当てられる。そこでは、若者がサッカー、バレーボール、ネットボールなどの種目で競い合う。オーストラリアでは、同国テニス界のスター、パット・ラフターとイボンヌ・ゲーラゴングが運営する「オリンピック・エイド・プロジェクト」の現地組織が、恵まれない子どもたちを援助する。



REPRINTED WITH PERMISSION.

「難民とは何か？ そんな定義は当事者にとってはどうでもいい。みな同じホームレスなのだ。」ところが「世界で家を失った人々の3分の2がIDP(国内避難民)という忌まわしい略語で区別されている。」

リチャード・ホルブルック米国連大使
(難民と国内避難民の違いを討論した国連会議で)

「アフリカのどの国で、具体的な復興計画が立てられているでしょうか。抛出国が惜しみなく資金を提供しているコソボや東ティモールのような計画が。」

緒方貞子・国連難民高等弁務官
(アフリカ諸国への長期援助に対し、世界各国が見せる対応の矛盾に言及して)

「私は資金を依頼しました。しかし、約束だけで入金はまだ1ドルもありません。」

コソボ駐留のNATO軍司令官クラウス・ラインハルト大將(コソボ自治州の公務員給与、1億

2000万ドルを調達する困難な仕事について)

「街全体がまるでコベントリー(ドイツ空軍の猛攻撃を受けた英国の都市)かワルシャワかスターリングラードのようだ。これ以上ひどい破壊はない。」

首都グロズヌイの惨状を、第2次大戦中に破壊された他の都市と比較するチェチェンの一市民。

「5年の間にボスニアで何が起きたかをまず考えて、それから、

コソボで5カ月の間に行なわれた活動を見てほしい。そして説教はやめていただきたい。これほど早く遂行された国連の任務はない。」

ベルナルド・クシュネル国連コソボ暫定統治機構特別代表(コソボ自治州で、国連の対応の遅れを非難する声に反論して)

「子どもたちは、もう泣きません。これが一番こわいことなのです。みんな泣くのを忘れてしまいました。」

破壊された故郷と打ちひしがれた人々を語るチェチェンの看護婦。

「世界が(虐殺について)知ったら、『アフリカ人はやはり野蛮だ。人間ならそんなことができるはずがない。近代国家の仲間入りをしなさい!』と言うだろう。」

南ア共和国のネルソン・マンデラ前大統領(ブルンジ紛争の新たな調停役として、各勢力に和平を呼びかけている)

「誰もがテロには反対だ。しかし、テロに対抗するにはそれに対応した武力行使をするべきだ。一般市民に危害が及ぶような状況は、細心の注意を払って避けねばならない。」

コフィ・アナン国連事務総長(チェチェンにおけるロシア軍の任務について)

「ブルンジ国民の苦悩は私たちすべての問題であり、また、私たちすべての人間性を損なうものだ。」

南ア共和国のネルソン・マンデラ前大統領(ブルンジでの内戦を止めさせるため、調停役という新たな任務を引き受けて)

「分裂する力は統合する力よりもはるかに強い。」

カール・ビルト・ボスニア前上級代表(コソボの状況を評して)

「このセルビア人はアウシュビッツのユダヤ人と同じ思いだ。」

コソボの町ミトロビツァのセルビア人指導者(最近起きた民族衝突のあとで)

